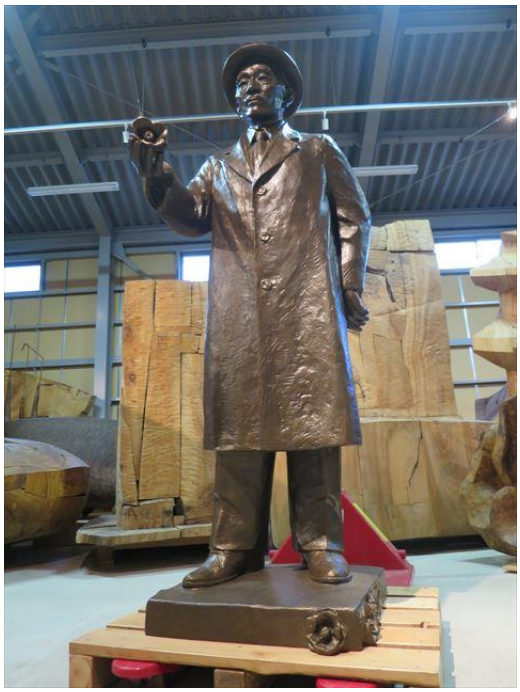
寺田寅彦銅像物語

宮　英司

「寺田寅彦記念館友の会」への入会は、平成 15 年頃だったと記憶している。横浜中学校に勤務していた頃に、社会科の大先輩の堀見矩浩さん（当時の事務局長）に勧められたことがきっかけだった。ただ、二つ返事で入会したものの、本務が多忙で現職の折には全く参加できなかった。

退職後の平成 23 年、今度は校長会の先輩でもあった宮崎嗣生さんに誘われて、寺田寅彦記念館友の会の役員に就任した。新任は山本健吉さん（現会長）と私だった。会は新旧の役員交代期に差し掛かっていたらしく何度かの会合が重ねられていた。どちらかと言えば、理科の先生方が多く、社会科の自分が役員でいいのだろうかと自問自答しながら参加していたように思う。

友の会には、熱心な寺田博士ファンが集い合っている。名古屋の山田功さんはかつての国語教科書に登場していた寺田博士の作品を丹念に調べている。徳島の四宮義正さんは全国に残る寺田博士ゆかりの地を巡る研究を続けている。新潟の佐藤妙子さんは「『吾輩は猫である』に出てくる寒月先生が好きだから、モデルとなった寺田博士のことが知りたくて来ています」と･･･。また、長らく寺田寅彦記念館の管理の仕事に携わってきてくださった伊東喜代子さんは、記念館の隅々まで知り尽くしたうえで、遠来のお客様の満足を引き出す解説をしてくださっている。



遡れば、教育界の重鎮であった依光賢一郎さんを始め、寺田博士に関する著書も出された恒石直和さん、鈴木堯士さんの歴代会長さん。また、堀見矩浩さん、田村雄一さん、松下貞夫さん、菊地時夫さんの歴代事務局長さん。こうした役員さん方が紡いできた会である。鬼籍に入られた方も多くなったが、それぞれの時代に寺田博士の顕彰に務めてきた。最近では、会長兼事務局長の山本健吉さんによって会報の「槲」が充実してきた。また、田口保雄さんの尽力によりホームページも開設され、ネット上に情報を提供しつつある。その他、熱心な寺田博士ファンよって支えられている会である。

平成 24 年に「友の会」のメンバーが頭をひねって「どうしたものか？」と悩む場面に出くわした。手元に、朝日新聞（2000 年 10 月 3 日号）「この 1000 年の優れた日本の科学者」の読者人気投票の記事があった。それは、何と寺田寅彦博士の弟子であった中谷宇吉郎氏（世界的な雪の研究家）が第 6 位、恩師の寺田博士は番外の第 14 位という記事だった。そして「何故こうなったのか？」、「どうすれば寺田博士の偉大さをもっと多くの方々に認識していただけるのだろうか？」等の協議が延々と続いていた。みんなの気持ちは「せめて弟子の中谷博士よりも上の第 5 位くらいにもっていきたいなぁ。」といったところだったかと思う。（ちなみに、この記事では「第 1 位野口英世、第 2 位湯川秀樹、第 3 位平賀源内」となっていた。）

ここで、寺田博士が「ノーベル賞」を貰い損ねた話を紹介しておきたい。大正年間の始め頃、博士は「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」をまとめて論文として発表すべく、科学雑誌「ネイチャー」へ原稿を郵送していた。しかし、当時は船便であり、おそらく先方へ届くまでに 3 か月ほどかかったと思われる。しかも、修正などがあれば、また 3 か月かかるということになる。つまり、何回か往復していると思うと半年か 1 年はかかっていると思われる。運悪く、同じような内容をイギリスのヘンリー・ブラッグとローレンス・ブラッグ親子が研究しており、彼らは 1913 年 1 月 23 日の日付で発表した。研究内容については、ブラッグ親子のテーマ「X 線による結晶構造解析に関する研究」からご想像いただきたい。ブラッグ親子はイギリスに住んでいたから 1 時間くらいで論文が届いただろうことを思えば、彼らは地理的に圧倒的に有利であったことになる。（彼らは、これによって 1915 年のノーベル物理学賞を受賞した。）寺田博士の研究は「ネイチャー」の同じ年（1913 年）の 4 月号に掲載されている。イギリスと日本、地理的条件が同じであったら寺田博士のノーベル賞受賞が実現していたかもしれなかったといわれている。まさに、タッチの差のできごとであった。（これは平成 29 年度に「友の会」がお招きした熊本大学名誉教授の柏木濶さんの講演「寺田寅彦と熊本」でお伺いしたものである。五高時代に寺田博士が柏木さんのお宅に下宿していたこともあり、柏木さんは驚くほどの様々な資料をお持ちであった。なお、寺田博士は 1917 年にこうした研究の業績により帝国学士院恩賜賞を受賞している。）

ところで、「寺田博士の偉大さをもっと多くの方々に知っていただくためにどうしたらいいか？」の問いかけの真っ只中で、私はぼそりと「寺田博士の銅像を建てましょう。」とつぶやいた。これが 5 年間も続くことになる銅像建設運動のスタートだった。言い出しっぺの本人は気楽なもので、10 年かかっても 20 年かかっても少しずつ寄付を募って、資金を蓄え、末永く運動を展開することがひいては寺田博士の業績を広めていくことにもなるだろう･･･などと勝手に考えていたのだった。

それはともかく、寺田博士の再評価の機運は以前よりも高まりつつあると思う。新聞等における博士の文章の引用がずいぶん多くなってきたし、「天災は忘れられたる頃来る」は、東日本大震災の際に何度も引用された。さらに、今日の日本に改めて大きな警鐘を鳴らし続けている。また、博士の著書が相次いで復刻出版され静かなブームとなっている。このことは、日本全体が博士の考え方を必要としていることに他ならない。こうしたことも含めて、次の世代へ博士が残してくださった「科学する心」をしっかりと引き継いでいく必要性を感じている･･･。こうした大義名分を考えたのは銅像建設運動がスタートしようとする頃であった。ただ、これらは取って付けた話ではなく、それくらい私たちがもっと早く博士の顕彰運動を起こすべきであった･･･という反省を込めての取り組みであったと言うべきだろう。

平成 25 年度の「寺田寅彦記念館友の会」の総会において「寺田博士の銅像を建設するための運動をすすめよう」という提案が正式に承認された。そして、運動の主体となる「寺田寅彦の銅像を建てる会」の結成を目指して準備が進められていくことになった。

私たち（山本健吉会長、宮崎嗣生幹事、私）3 人は、高知新聞社の名誉顧問を務めておられる橋井昭六さんを訪ね、何度かご助言をいただくことにした。（宮崎幹事は橋井さんと親しく交流があった。）最初に、橋井さんは（建設中であった）「高知県立高知城歴史博物館」の役を引き受けている事情もあり、「寺田博士の銅像建立については役を受けずに完成に向けて協力はさせていただく。」とのお言葉をいただいた。併せて、高知県・高知市の了承を取り付けること、また県・市の教育委員会への説明や県立文学館への説明、高知新聞社への協力要請、高知大学をはじめとする理学・科学関係者への働きかけ、高知追手前高等学校の校友会への働きかけ、さらに県民あげての取り組みとなるよう心を砕くように･････等々のご示唆をいただいた。また、寺田博士に関しては「博士は多方面にわたって長けている方だ。地震に対する警告では第一人者であり、多くの警句を遺されてもいる。また、『学校が地震でつぶれるようなことがあれば国の恥だ』と書いて『災害に負けない学校づくり』等も提唱している」などのお話をいただき、大いに頑張るように激励をいただいた。

平成 26 年 5 月 1 日、ついに「寺田寅彦の銅像を建てる会」が発足した。会長に青木章泰高知商工会議所の会頭、副会長には高

知県の経済界の方々に大勢お入りいただき、大船に乗ったような気分であった。なお、事務局長には山本健吉友の会会長が就任した。（私たちは事務局員となった。）会の中で「寄付を募るからには、その寄付が税の控除の対象になるように手続きをきちんとすることが重要だ。」とのご助言をいただき、税務署との折衝が必要となった。この点については、すべてを山本事務局長があたってくださった。新聞報道にも取り上げられ、順風満帆の思いの中、平成 26 年 9 月に募金活動がスタートした。ところが、いざ募金はスタートしても、そう簡単には寄付金は集まらず、個人の募金を広くお願いして回ることが多くなってきた。各地の高知県人会、寺田博士の母校（追手前高校等）の校友会、高知県教職員友の会、退職教職員の会、理科や社会科の研究会、土佐史談会、思いつく範囲で次々とお願い文書を郵送する作戦に出た。

募金が伸びない中でも大口の寄付があって、驚くことも多々あった。高知市教育委員会の委員さんから「直接、話がしたい。」とのことで、かしこまってお伺いすると、「亡くなった祖父が寺田先生には特別にお世話になっていた。こうした機会が巡ってきてうれしい。」と 100 万円の寄付をいただいた。しかも、税の控除の対象とはせずに、「亡くなった祖父名義の寄付をしたい。」とのお申し出に恐縮してしまう訪問となった。あわせて、おじいさまが寺田博士からいただいた葉書きや水彩画、また寺田博士の死亡広告の新聞記事などをきちんと保存しておられて、鑑賞させていただく場となった。コレクターの方にとっては超一級の寺田コレクションともいえる値打ちモノばかりであった。

土佐史談会へお願いし、文書を配布した時には一個人の会員さんから 50 万円もの寄付をいただいて、感激するやら寺田博士の偉大さを改めて認識したことであった。募金は 1 年間の計画であったが、平成 27 年 12 月まで 4 か月延長して目標の 1000 万円を達成した。

銅像の制作は、県展彫塑の部の無鑑査作家・大野良一さんにお願いした。若い頃から才能に恵まれ、連続して特選を受賞し、最短コースで無鑑査になった方である。最近では「シェイクハンド龍馬像」の制作にも携わられていた。銅像のポーズは、博士が若い研究者や学生たちに折に触れて声をかけていたという「ねえ君ふしぎだと思いませんか」を彷彿とさせるものを…との注文をつけさせていただいた。何度か仁淀川町のアトリエに通い、寺田博士像の試作品を見るにつけても「大野さんにお願いして良かった」という思いが沸々と湧いてきた。大野さんは彫塑に対する真摯な姿勢だけでなく、寺田博士を理解するために、寺田博士の随筆を次々と読破されていた。そこから大野さん自身の制作にまで大きな影響が出てきているのを私たちは後で聞かされることとなった。

大野さんは、毎年東京の「新制作展」に出品を重ねられていた。ただ、最高レベルの彫塑展とあって、大野さんは思うような結果を出すことができていなかっ

た。しかし、寺田博士の随筆から「椿」にヒントを得て、いつもの裸婦像ではなく「椿」に取り組んだ結果が、平成 26 年度「新制作展」の数少ない賞である「新作家賞」の受賞に繋がったというのである。テーマは「門椿」であった。この年の秋には、大野さんのお仲間とともに、お祝いの席が開かれ、私たちの青木章泰会長からも祝辞を述べさせていただいた。青木会長は「寺田博士の銅像は、どうして今までに創られていなかったのでしょうか。」と会場へ投げかけられ、参加者の共通の思い（大野さんによって創られるのを待っていたこと）を呼び起こそうとされているかのようで感激したことだった。

「椿」についてもう少し書いておく。「落ちざまに虻を伏せたる椿かな」夏目漱石の句である。熊本の第五高等学校時代に夏目漱石から教えを受けた寺田博士は、この句について文章を残している。「偶然な機会から椿の花が落ちるときにたとえそれが落ち始める時にはうつ向きに落ち始めても空中で回転して仰向きになろうとするような傾向があるらしいことに気がついて、多少これについて観察しまた実験をした結果、やはり実際にそういう傾向のあることを確かめることができた。それで木が高いほどうつ向きに落ちた花よりも仰向きに落ちた花の数の比率が大きいという結果になるのである。（･･･中略･･･）それでもし虻が花の芯の上にしがみついてそのままに落下すると、虫のために全体の重心がいくらか移動しその結果はいくらかでも上記の反転作用を減ずるようになるであろうと想像される。すなわち虻を伏せやすくなるのである。こんなことは右の句の鑑賞にはたいした関係はないことであろうが、自分はこういう瑣末な物理学的の考察をすることによってこの句の表現する自然現象の現実性が強められ、その印象が濃厚になり、従ってその詩の美しさが高まるような気がするのである。」（寺田寅彦著「思い出草」から）

漱石と寺田博士の出会いもほほえましい。毎年、熊本の第五高等学校では年度末に同学年の「落第」しそうな学友のために、代表者を選んで、その学友を「落第させないでください」というお願いに行く風習があったという。漱石の英語の点数が足りない学友のために代表者に選ばれたのが寺田博士であった。その時に、寺田博士は「俳句とはいったいどんなものですか」と質問をしたらしい。その時のことを『夏目漱石先生の追憶』の中で、「自分は、世にも愚劣な質問を持ち出した。」と綴り、漱石が「俳句とはレトリックの煎じ詰めたものである。」などと

興味深い説明をしたと語っている。「それからが病みつきで随分熱心に句を作り、週に二、三度も先生の家へ通ったものである。・・・まるで恋人にでも会いに行くような心持で通ったものである。」英語と俳句を学んだ漱石との出会いを寺田博士はこのように振り返っている。

実は、大野さんはこの年だけでなく、翌年（平成 27 年）も「藤の実」「鞘」で「新作家賞」をいただき、「ちより街テラス」で展示会を盛大に開催することになった。この作品の着想も、寺田博士の随筆から出発したことは、寺田作品を読まれた方にはご理解いただけると思う。また、コート姿の寺田博士を着想して、モデルとなる方の選定や当時のコートの発掘にもずいぶんご苦労されたお話もうかがった。

平成 28 年度には、大野さんに友の会の講演を依頼した。「寺田寅彦先生の科学者の眼に学ぶ」と題して、寺田博士の銅像制作に取り組む中で「自分の彫刻が進化した」と感じた経過を語ってくださった。講演の中で「『ねぇ君、ふしぎだと思いませんか』と問いかける科学者の眼は、多くの人々が見落としたものを新鮮な驚きと興味を持って克明に見ているのです。これは芸術にとっても大事なことです。わかってはいても、改めて共感し実感しました。彫刻に科学者の眼を持ち込みました。克明な観察から見出される自然の成り立ちや摂理にはあいまいでない美しさがあります。これを作品にするには、この美しさの妙味を踏まえて、感性のフィルターを通して表現する意義を見出すことだと考えました。『藤の実』は、書斎のガラスをパチンと打った藤の実の弾けた章から構想を得ました。誰もが見落とすものに、眼を開かせてくれました。（･･･中略･･･）たくさんのご教示をいただいた先生への恩返しも含めて銅像制作に全力で取り組む所存です。」等と述べられ、参加者を見事に「銅像制作と寺田博士」の世界へ引き込んでいた。

やがて、銅像の試作品はいくつも仕上がり、さらに寺田博士の「頭像」を中央の会へ出品していたとも聞く。その「頭像」を鑑賞した高名な美術評論家が「寺田博士に似ている」と唸った話には、私たちも思わず笑みがこぼれた。（その後、「頭像」の一つは大野さんから寺田寅彦記念館に寄贈された。）そして、私たちは再び仁淀川町のアトリエを訪れ、石膏像が富山県の鋳造所へ出発する日を心待ちすることになった。

台座の文字については、当初著名な書家のお名前もあがっていたが、最終的には地元の方に…ということになり、私たちは迷うことなく依岡稔さんにお願いをした。依岡さん（毎日書道展審査会員）は、長らく高知県教育界の牽引役を務めてこられ、退職後も子どもたちや多くの教職員に書の指導を重ねてこられた方であった。4 年前には、ご子息の依岡隆児さん（徳島大学教授）に「寺田寅彦の文学的世界」と題する講演を友の会で拝聴したこともご縁であったかもしれない。「子どもたちにわかりやすい字を書こうかねえ」と静かに意気込みを語り、『ねえ君ふしぎだと思いませんか　寺田寅彦』の揮毫をすまされた後、平成 29 年 10 月 15 日に 85 年の生涯を閉じられた。柔らかな筆によって刻まれた文字が絶筆となった。

台座の右側には、寺田寅彦記念館の入り口にある牧野富太郎の書と伝えられる「天災は忘れられたる頃来る」を復刻することとした。左側には、寺田博士が活躍していた当時に流行していたローマ字の書（博士自筆）「好きなもの　イチゴ　コーヒー　花　美人　ふところ手して　宇宙見物」を、これも復刻することとした。

銅像の設置場所については、県市の合築の図書館「オーテピア」ができた時に、その敷地内へ･･･という希望を持つようになっていた。一つには新図書館が「科学館・プラネタリウム」を設置すると聞いていたことと、また博士が優れた随筆をたくさん残していること、そして寺田博士の母校である高知県尋常中学校（現高知追手前高校）を臨むことが可能になること等を考えて博士像の設置に相応しい場所であると考えたのであった。このオーテピアへの設置については、最終的には青木章泰会長と岡﨑誠也市長の話し合いで決まったように聞いている。

また、子孫の方々へもお知らせなどをしていたが、頭像の設置のこと等をお知らせしていた関直彦様（お孫さん）から次のようなお返事をいただき、事務局一同喜んだことだった。「お知らせをありがとうございます。9 月にご案内をいただき、国立新美術館で催された『新制作展』の頭像を見に行きました。実物大、かつ写実的で、眺めると妙に懐かしい思いにとらわれました。素晴らしい出来ですね。寺田寅彦記念館に設置されるとのこと、良かったですね。」

そして、平成 29 年 12 月 6 日、完成した銅像が富山県から仁淀川町の大野良一さんのアトリエに到着した。会を代表して山本事務局長が仁淀川町へ出向いた。その時の喜びを山本氏は「やっと寺田博士に会えた。ありきたりだが、写真で見るのと違って表情が豊かだ。呼びかけてくれているようにも見えるし、微笑んでいるようにも見える。直に同じ目線でお会いすることができて感無量だった。」と語ってくれた。

ところで、この運動のスタート前からお世話になった橋井昭六さんに進捗状況の報告を兼ねて山本事務局長からお手紙を出させていただいた。程なくしてお便りがあり、大いに喜んでいただいた。「前略、『寺田寅彦像』の写真や情報ありがとうございました。位置は『オーテピア』の東北端でも結構じゃないですか。寅彦母校の高知県尋常中学校（高知追手前高校）も臨めるし、人の目にもつくことでしょう。とにかくここまで運ばれた建てる会の皆様方。『無から有を生じた』お力に感心いたします。あとは完工を待つのみでしょう。像の出陣が待たれますね。また、ご用のときはご連絡下さい。本年は寒さ厳しく、春が待たれます。一層のご自愛を。草々」

最後に銅像について書いておきたい。高知市には、たくさんの偉人の銅像がある。その中へ、私たちの寺田博士の銅像が仲間入りをする。素直にうれしい。やがては「銅像めぐり」が高知の財産となっていく……。そんな夢を描きつつ、浄財をお寄せいただいた多くの方々に心からのお礼を申しあげ、この文を終わることにする。今、私たちはこの 5 年間の銅像建設運動を振り返りながら、平成 30 年 7 月 24 日の「寺田寅彦像」の除幕式を静かに待っているところである。

（寺田寅彦記念館友の会　副会長）

● 資料１（台座の言葉）

（まえ）

ねえ君　ふしぎだと思いませんか

寺田　寅彦

（みぎ）

天災は　忘れられたる頃　来る

（ひだり）

（ローマ字）

好きなもの　いちご　コーヒー　花　美人

ふところ手して　宇宙見物

● 資料２（建立記）

（うしろ）

建　立　記

寺田寅彦生誕 140 年の記念すべき年

南海トラフ巨大地震への警鐘を鳴らし 科学する心の大切さを伝えるために 新しい図書館「オーテピア」の開館に合わせ 母校高知追手前高校（旧高知県尋常中学校）を臨むこの地に銅像を建立できたことをともに喜び合いたいと思います

ご協力いただいた多くの方々に心からお礼を申しあげます

2018 年 7 月 24 日

制作　　大野　良一

題字　　依岡　　稔　（紫峰）

建立　　寺田寅彦の銅像を建てる会

会長　　青木　章泰

● 資料３（説明板）

寺田寅彦
（1878 年 11 月 28 日～1935 年 12 月 31 日）

寺田寅彦は、明治 11 年（1878）東京生まれの物理学者で、「天災は忘れられたる頃来る」の警句を残しています。
寅彦の父は、坂本龍馬と同時代に生きた土佐藩の郷士で、明治時代には陸軍会計官となりました。寅彦は、3 歳の時に大川筋の実家に帰り、少年時代を過ごしました。江ノ口小学校、高知県尋常中学校（高知追手前高校）を経て、熊本の第五高等学校に入学。そこで田丸卓郎に物理学を、夏目漱石に英語と俳句を学び、東京帝国大学時代には正岡子規とも知り合いました。

寅彦は生涯に 200 編余りの物理論文を発表しました。その研究スタイルは、日常の諸現象を徹底的に分析し、寺田物理学ともいわれる独自の領域を切り拓きました。その過程で、「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を受賞し、文化切手にもなりました。また、一方で「冬彦集」「藪柑子集」「萬華鏡」「続冬彦集」「柿の種」「物質と言葉」「蒸発皿」「触媒」「蛍光板」「橡の実」などの随筆等も残しています。さらに俳句、油絵、オルガン、バイオリンなど幅広く才能を発揮しました。「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と称する人もいるくらいです。恩師・夏目漱石とのつながりも深く、「吾輩は猫である」の水島寒月は寅彦がモデルでした。

「ねえ君　ふしぎだと思いませんか」は、寅彦が学生や若い研究者たちに折に触れて語りかけた言葉で随筆等にも登場します。寅彦は、少年期を大高坂山の緑と清らかな江ノ口川に代表される、美しく魅力あふれる土佐の豊かな自然の中で過ごしました。この体験が生涯を通じ、心の糧となったのです。後年、研究室で「科学者になるためには自然を恋人としなければならない」と語った寅彦は、科学者としての鋭い目と随筆家としてのしなやかな心を自然の中でじっくりと育んだのでしょう。

私たちは、寺田寅彦生誕 140 年の記念すべき年に銅像をこの地に建立できたことをともに喜び合いたいと思います。「オーテピア」には多くの関連資料があります。今後は、寅彦の教えに学びつつ地図を参考にして、近隣に残るゆかりの地を巡ることをお奨めします。

2018 年 7 月 24 日

寺田寅彦の銅像を建てる会

● 資料４（募金趣意書）･･･参考　「高知県人名事典　新版」　高知新聞社

平成２６年９月吉日

寺田寅彦の銅像建立について

寺田寅彦の銅像を建てる会
会長　青木　章泰

寺田寅彦は 1878 年（明治 11 年）11 月 28 日に東京市麹町区平河町 3 丁目（現在の東京都千代田区）に、父寺田利正、母亀の長男として生まれました。（父寺田利正は坂本龍馬と同時代の郷士であり、井口事件等を通じて交流もあった人で、明治時代には陸軍会計官を務めました。）寅彦には姉が 3 人いて、4 人兄弟の末っ子でした。1881 年（明治 14 年）3 歳の時に高知市大川筋の家に一家とともに帰り、江ノ口小学校を経て高知県尋常中学校（高知追手前高等学校）から 1896 年（明治 29 年）に熊本の第五高等学校に入学しました。そこで、夏目漱石に英語と俳句を学び、田丸卓郎に物理学とバイオリンの指導を受けました。そして、1899 年（明治 32 年）東京帝国大学理科大学物理学科に入学しました。その頃、夏目漱石を通じて正岡子規と知り合います。（なお、「吾輩は猫である」の水島寒月や「三四郎」の野々宮宗八は、寅彦がモデルであったと伝えられています。）

また、1903 年（明治 36 年）大学院に入り、実験物理学の研究を始めました。ここでは、音響学や潮汐の副振動など振動・波動に関する研究を行い、磁気学に関する論文を書きました。また、この頃から「ホトトギス」に「団栗」「龍舌蘭」「花物語」などの小説を発表しています。1904 年（明治 37 年）には東京帝国大学の講師となり、後進の指導にあたりました。1908 年（明治 41 年）には論文「尺八の音響学的研究」で理学博士となります。翌年には助教授となり、その年にドイツへ留学し、フランス、イギリス、イタリアなど各地で地象物理学について調査しています。1911 年（明治 44 年）に帰国し、1916 年（大正 5 年）に教授となります。1917 年（大正 6 年）には「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を受けました。その他に、航空研究所員、理化学研究所員、帝国学士院会員、地震研究所員などを務めました。

＊

博士の研究と興味・関心は非常に広汎で、ほとんど物理学のすべての領域にわたっています。その論文は 250 編に達しています。その内容は地震学、津波、海洋学、気象学、火災学、航空船の爆発、電気のスパーク、渦巻き、砂層の崩壊、ガラスの割れ方など災害、地球物理学に関するものを始め、椿の花の落ち方、生物の縞模様など、生物物理学といえる範囲にまで及んでいます。このように、日常身辺の諸現象を対象としてあくまで具体的に分析し、その間に何らかの法則性を見出そうとするところに所謂「寺田物理学」の特質があるといえ

ます。文学や随筆においても同様の手法が用いられ、独創的な着想、科学的な追究、警抜な結論などで日本文学の中に独特の境地を打ち立てました。それは、地震や災害等を題材にした随筆（筆名は吉村冬彦）を頂点とする「寺田文学」に結実しています。また、俳人としても松根東洋城らと晩年まで連句をつくりました。その他、油絵、水彩画、ピアノ、オルガン、バイオリン、映画批評など非常に幅広く才能を発揮しました。ある意味で「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」とも言える人だったのではないでしょうか。門下生に中谷宇吉郎、藤原咲平、宇田道隆ら英才が多くいます。著作は「寺田寅彦全集」（30 巻）に収められています。また別に論文を収めた科学篇 6 巻があります。

＊　　＊

「天災は忘れた頃にやってくる」は 2011 年（平成 23 年）の東日本大震災の際にも、何度も引用された言葉であるばかりでなく、今日の日本に改めて大きな警鐘を鳴らし続けています。また、東日本大震災以降、博士の著書が相次いで復刻出版され、静かなブームとなっています。こうした機運は、日本全体が博士の考え方を必要としていることに他なりません。

日本は、この未曽有の東日本大震災を経験し、南海トラフ巨大地震を始め、各地で予測される新たな震災等に立ち向かわなければなりません。こうした折、『天災は忘れた頃にやってくる』という言葉と永遠の警告を残してくださった寺田博士ゆかりの地・高知から全国へ、この思想を改めて発信する必要性を感じるものであります。また、未来の日本を託す子どもたちに、博士が残してくださった「科学する心」をしっかりと引き継いでいく必要があると考えます。そのためにも、博士がよく呟かれたという「ねえ君、不思議に思いませんか？」を彷彿とさせるようなモニュメントが必要だと思うのです。さらには、高知に寺田寅彦博士が生きていたことを後世に伝えていく使命感を感じています。

私たち「寺田寅彦の銅像を建てる会」に集う者は、こうした話し合いを重ねたのちに、多大な業績を残された寺田博士を顕彰し、あとに続く郷土の後輩たちに改めて博士の偉大さを知らしめるために、博士の銅像を建立し、高知市に寄贈して、現在建設が進められている新図書館（前高知市立追手前小学校敷地）の敷地内に設置していただこうと考えるに到りました。ご賛同くださる皆様方のお力をお借りして、一日も早く実現したいと考えています。